

5th Exhibition Table 総評

皆さんこんにちは。由浅健也です。春セミ 2017 のエキシビションテーブルの総評の導入を書きたいと思います。(導入に関して、多々至らぬ点がございますが、それらの内容は今回の春セミ 2017 の大会趣旨や現役の素晴らしい功績とは全く関係なく、一種のエンターテイメントとして私個人の自己満足に始まり終わるものです。春セミ 2017 の思い出の片隅にでもおいて頂けると幸いです。ご理解ご協力のほどよろしくお願いします。)

私が部屋に入ると、そこに見事エキシビションに残った 6 人が陣を組んで座っていた。幾多の激しい戦を勝ち抜き安心したのか、たとえ誰かが爆音で屁をこいたとしても許されると思われるような、和やかな雰囲気では部屋は満ちていた。実際のところ屁をこいていた人間がいたかどうかは確認が取れない為、定かではないが、言うまでもなく、エキシビションテーブルを控えた人間がたとえ屁こきをしたところで、誰も批難しないことは私が自信をもって保証する。

さて、ここで栄えある屁こきの勇者たちを紹介しておく。

えせ弁護士：富永（東大 3）

マッドサイエンティスト：廣橋（早稲田 3）

えせコメンテーター：金井（スターダストプロモーション）

ラグビー部主将：宋（上智 3）

はねっち：CHAIN EREAKER（松竹芸能）

骨川スネ夫：北川（藤子・F・不二雄）

プリンス・カメハメ：Mr. ポテトヘッド（読売巨人軍） 欠席

カメハメを除いた 6 人によるエキシビションがドン小西（大和田）の大きな三三七拍子によって始まった。ドン小西はこの日の為にメトロノームを用いた三三七拍子の練習を二か月も前から行っており、その練習の甲斐あってか、寸分の狂いもない人類の到達点のような三三七拍子を披露した。そのスピードは複眼のオニヤンマ、高性能超音波センサーのイルカの認識可能領域をはるかに超えるものであったため、誰もドン小西が三三七拍子をしたことに気づかず、辛うじて驚異的な洞察視力を備えていた DJ モーリタニア（由浅）が仕方なく関東一本締めを行い、エキシビションテーブルが幕を開けた。その時の現役の奇怪なものを見る目は今でも忘れられない。

導入 以上

編集後記

僕のふざけた総評を最後まで読んでいただき誠にありがとうございます。改めて申しておくと、導入は本当に本大会の趣旨とは全く関係の無いものであり、くだらないものであることは私も自覚しております。皆様がいつの日か本大会を振り返った時、思い出話に花を咲かせる一要素としてお使いください。

それにしても、本当に皆様お疲れ様です。打って変わって、少し真面目なことを書きたいと思います。正直言って今回のエキシビションテーブルは内容に関しては、それほど深いものではなかったと思います。ですが、ここまで勝ち抜いてきた彼らの頭のキレや、それを言葉化してテーブルに提示する能力は本物だったと感じております。いわゆる「あ一言えばこういう」能力が強く、加えて、そこにその精度の高低はあれど、ある程度の理由が添えられていたので、この能力は他の現役もお手本にしてほしいです。アッセンに向けて、不足している能力のさらなる向上に努めてもらいたいと思います。本当にお疲れ様でした。

議論の大まかな流れ

文責 鶴殿（早稲田 4）

はじめに

エキシビジョンテーブルをジャッジしました早稲田大学の鶴殿です。他人の議論の評価を与えるに足りるほどの者ではありません。最大限ジャッジ間で理解を合わせ評価しましたが、第三者であるため内容に関して理解の至らぬ点があるかと思います。その点に関してはどうかお許しいただきたいです。

テーブルメンバー

廣橋（早稲田 3）羽根川（立教 3）富永（東大 3）

金井（早稲田 3）宋（上智 3）北川（慶應 3）

ジャッジ

由浅（立教 4）大和田（明学 4）鶴殿（早稲田 4）

議論の大まかな流れ

廣橋がオピニオンプレゼンターに選出され検証が始まった。トピックは臓器移植であったが、モデルオピニオンシートと異なる点が大きく 3 点あった。Direction が”make win-win situation”であること、政策が臓器売買合法化であること、実行性の検証を①技術があるかどうか②医療倫理に適するか否か(通常のタスクでは話し得ない論点の検証)の 2 回行うことである。

Direction と政策に関してはのちに述べる。実行性に関して①は solution の 1st linkage にて、②はコンパリソンの結果 $AD > DA$ になった場合に検証することとなっていた。②に関して、実行性の議論を 2 回に分けることに対する質問が集まったが、本来技術的に問題がなければ実行性は証明されうるものであり AD を取る上では問題がないこと、②ではテーブル内で反論があった場合のみ検証することを共有し、ASQ の議論が始まった。ASQ では特に目立った論点がなく、円滑に進んだ。

Direction と Mandate の全貌は次の通りである。Direction の win-win situation とは臓器を買う側と売る側、どちらにも利益があり、それによって DA が起きないことであると宋の一連の質問によって明らかになった。臓器を買う側とは今日のターゲットである臓器を欲している患者のことであり、この政策によって利益(=AD)が受けられることは想像し易い。臓器を売る側とは、①自殺志願者②自分の臓器を売ったお金で家族を助けたいと考

えている人であり、売る側の利益(=Additional AD)は自殺ができることそのものと、臓器を売ることによって少しでも家族を助けられることである。

①の売人に対して富永から自殺志願者が方法として臓器売買を選ぶのかどうかというダウトが提示された。思考が止まった極限状態の人が自殺と臓器売買のメリットデメリットを比べた上で、臓器売買を選ぶようなことは不可能だろうという主張である。

これに対して宋は自殺者が死ぬ間際に他の人のメリットを考えて臓器売買を選ぶという反論を提示した。宋の反論は、極限状態でも考える余裕がある（例：殺された被害者が息途絶える前にダイニングメッセージを残す）というものであった。富永は宋の例外を認め、金井を中心としたカンファメーションにより富永のアイデアは **2nd practicability** で話されることとなった。

AD が証明されたので、北川と富永と羽根川が DA アイデアを提示し、富永の家族のために自殺して欲しくないという自殺志願者家族の DA が選ばれた。ここで廣橋が AD ターゲットはメリットがないが、DA ターゲットには政府からの謝礼が得られるというメリットがあるという AD>DA コンパリソンの検証中に終了した。

順位選定とその理由

文責：大和田知弥（明治学院 4 年）

はじめに

ここからは 2017 年度春の大セミナー 5th Exhibition Table の順位、それに応じたランクの授与と理由について述べていくものとする。

順位とランクの付け方について

本年度の 5th Exhibition Table は 2 つの 4th Exhibition Table において好成績を残した 6 名から構成されている。またジャッジ基準局の方針として本テーブルの 1 位には自動的に D+ランクの授与、他 2 位～6 位の参加者には D ランクを授与する運びとなった。また順位選定に関しては本年度のジャッジ基準を使用し、本テーブルのジャッジをした大和田、鶴殿、由浅の 3 人によって各発言の解釈を統一したうえで行った。これらの方針は順位選定とランク授与に関してできるだけジャッジの主観を取り除き公正な判断のもとジャッジを行おうという考えに基づくものなので参加者並びに本総評を読んでいる方には理解していただきたい。以下にその結果を掲載する。

最終順位とランク

1 位：富永（東大 3）D+ランク

2 位：廣橋（早稲田 3）D ランク

3 位：金井（早稲田 3）D ランク

4 位：宋（上智 3）D ランク

5 位：羽根川（立教 3）D ランク

6 位：北川（慶應 3）D ランク

選定理由

1 位：富永（東大 3）

本テーブルにおける彼の役割は廣橋（早稲田 3）の提示する特異なオピニオンシートに対して反論を提示することであった。常に批判的な立場からテーブルを観て、**workability** における反論とその後の **DA** を立論したことが彼を 1 位とした積極的な理由として挙げられる。

しかし本年度のジャッジ基準による採点では 2 位との点差が非常に少なかったこともまた事実である。その理由として挙げられるのは、

①彼の展開するアーギュメントが議論に与える影響が少なかった、もしくは不明であったこと

②自身の主張から他人を巻き込む論点を提示できなかったこと の 2 点である。

これは完全に私の私見であるが本テーブルにおいて **ASQ** 上ではその後のディスカッションの核となりうるダウトや論点の抽出が多く行われていた。しかしその中で彼の提示した論点がどれほど優先度を持っていたのかに若干疑問を感じざるを得なかった（これは彼の提示した **solution** でのアーギュメントが **some cut** 以上の意味を持たなかったことによる）。また、これに関連して彼の提示するアーギュメントや **DA** が他の参加者の論点を内包できず結果として廣橋（早稲田 3）とのディベートになっていたことも問題である。

今後関東を代表するディスカッサントとして彼に求められるのは議論を創ることではないかと私は考える。持ち前の論理性として常にテーブルの中心になり続けるとともに結論への意識を高く持ち他者と協力しながら議論を共創していくことができれば更なる成長が見込めるだろう。

2 位：廣橋（早稲田 3）

今回、彼の役割はオピニオンプレゼンターとして議論の土台を造ることであった。臓器売買を合法化するという新規性の高いトピックに加えて、普段 **practicability** ではタスク上話しえない内容について議論するエリア（以下 **2nd practicability** と呼ぶ）を設けるなど、**problem-solvency format** の利点を活かしつつ新たな試みを持っていた点は大いに評価される点である。

また議論という行為においても彼の介入の仕方には無駄が感じられず非常に自然な会話のもと議論を行っていた。これは議論評価するうえでは対象にならないが本総評を読んでいる現役諸君は参考にすべき点であることは確かである。

このように彼にはディスカッサントとして優れた素質が多くみられるが本テーブルではその精彩を欠いた形となった。新規性のあるプロシーチャー（以下プロシ）にも関わらず、オピニオンプレゼンター（以下オピメ）として明確な論点を提示することができず、積極的に論点を提示する富永（東大 3）に対して常に後手に回ってしまっていた。本年度

のジャッジ基準において彼が評価を受けたのはADの立論とその後のコンパリソンでのアイデアの提示、細かいQCにとどまっており、今回のようなプロシを展開した意味や意図が無駄になっていた。

彼の改善点としては前述の富永（東大3）と共通して議論を創っていく技術が挙げられる。コンテンツに減法強い彼だからこそ意見を提示する際には論点の明確化とその中身を話すためにテーブルメンバーを導いていくことが求められるだろう。しかし、1位の富永（東大3）同様にコンテンツに対して真摯に議論する姿勢は関東を代表するディスカッサントとして誇ってほしい。今後の成長に期待する。

3位：金井（早稲田3）

本テーブルにおいて富永（東大3）と廣橋（早稲田3）のディベートが行われるなか、終始第三者としての姿勢を崩さずに両者の間を取り持っていたのが彼である。比較的マクロな視点から議論を見つめ、両者の主張の行き違いや足りない情報の補完を行い、テーブルを前に進める提案を行っていた。少ない介入量ながらも的を射た必要十分な介入はジャッジからも高い評価を得ることとなった。

惜しむらくは、テーブルに散在する論点を結論へ導くことができなかったことである。本テーブルにおいては「比較的に」マクロな視点を持っていたものの、結局はその場にある議論の交通整理に終始してしまったという点が惜しいところである。今回のテーブルであれば思い切って富永（東大3）のアーギュメントを「話さない」という舵取りをしてもよかったのではないかと私は考えている。

そうは言ってもコンテンツ志向の高い今年の現役の中では非常に重要な存在であることは確かである。今後はハンドラーとしてのより一層の精進を期待する。

4位：宋（上智3）

彼は本テーブルにおいて最も普段のパフォーマンスを出し切れなかった一人だと私は考える。彼の強みは頭の回転の速さとそれに基づいたダウトの提示、議論の軌道修正やコンテンツに深みを与えることであると私は感じているが、今回、廣橋（早稲田3）の提示したオピニオンシート並びに富永（東大3）のアーギュメントに振り回される形で普段見せている技術を披露するには至らなかった。

介入量自体は金井（早稲田3）を上回ってはいるがテーブルに大きな影響を与える介入が少なかったことがこの順位の理由である。彼が担えた役目としては臓器売買というトピックに対しての意見の提示ではなく **2nd practicability** の検証方法から逆算したうえでのプロシ全体に対するダウトと代替案の提示だったのではないだろうか。そのようなことができればより議論を効率的に、より深いコンテンツで勝負することができたはずである。持ち前の理解力の速さを武器に今後の活躍を期待する。

5位：羽根川（立教3）

3時間の議論を通して意味のある介入を幾度か見せた点が評価された。しかし介入はいずれも質問にとどまり、相対的に議論への貢献度は低いと言わざるを得なかった。ディスカッサントとしてあらゆる技術を高い水準で備えている彼だからこそ、オールラウンドに立ちまることができたのであれば、今回の議論の内容、結論そして個人順位にも大きな違いを見せることができたのでないだろうか。

強豪校とJIDMの顔として今後高いレベルのテーブルにおいてより存在感を増すことが当面の課題であると考えられる。

6位：北川（慶應3）

ASQ上から臓器売買がもたらす効用に対して批判的な姿勢を持っていたがその内容を形できなかった。もし彼がその意見を提示していれば富永（東大3）にとって代わる存在であったかもしれない。また富永（東大3）のアーギュメントの際にもマクロな視点からの情報整理に努めており、富永のアーギュメントの検証法にも常に懐疑的な視点をもつなどしていた点も評価できる。しかしいずれの発言も大きな影響を残すことなく終わってしまっていたゆえに積極的に評価することはできなかった。

彼にはPDDという枠組みで正しい議論をしようという姿勢がこの春セミ期に多く見られた。これは彼の強みであるがその考えをテーブルに浸透させなければ意味をなさない。今後はその正しさとテーブルを巻き込むことが重要であろう。

最後に

本年度のエキシビジョンテーブルも、去年の例のごとく一部の参加者を除いては個人の実力を発揮するに至らず、その点に関しては去年のエキシビジョンテーブルの経験者、ジャッジとしても残念なことであった。今年は傾向としてコンテンツに対する意識が高く去年の我々よりも高いポテンシャルを持っていると思う。しかしそのコンテンツの運用や効率的な話し方の提示や結論意識という面ではまだまだ改善の余地がある参加者がほとんどであることも確かである。私は方法論の提示とコンテンツとは表裏一体の関係にあると思っているがこの両立が難しいのがディスカッションのジレンマであると思う。去年がコンテンツに苦しんでいた代ならば今年は議事進行の仕方が全体的な課題といえるのではないだろうか。だからこそ今年の現役生にはコンテンツと方法論を両立することを意識してアッセンブリーに臨んでほしいと思う